

光円寺に葬った。

注(6) 大塚頼充〔よりみつ〕。天文家。善右衛門と称し、春湖また東嶽と号した。天文を佐竹春山に学び、宝暦10年〔1760〕悉く伝授を受けたという。名取春仲と同門だった。享和元年〔1801〕歿、70才、七北田村山ノ寺洞雲寺に葬る。

資料 岩出山町史上巻

39. 菅井梅関の墓はどこにあるのか

問 「仙台人名大辞書」によると、菅井梅関の墓は新寺小路生因寺にあることになっていますが、い
(1) (2)
くら探してもその寺は見つかりません。どこにあるのでしょうか。

答 菅井梅関は、天保15年〔1844〕1月19日、61才の時自殺し、生因寺に葬られました。ところが
(3)
この生因寺は明治維新後廃寺となり、隣の正雲寺に吸収されたのです。「仙台人名大辞書」(昭和
(4)
8年刊)の梅関の項は、梅関が生前親交のあった有名な漢詩人篠崎小竹〔しのぎきしょうちく〕の
(5)
書いた墓碑銘に基づいて書かれたもので、後の生因寺廃寺のことに及んでいません。墓域は荒廃するま
ま久しかったが、梅関愛好の有志が梅関会を組織し、昭和28年10月11日、正雲寺仏殿前西側中央に
改葬しました。したがって梅関の墓は生因寺にはなく、正雲寺にあったのですが、これも昭和48年
西郊葛岡墓園に移転してしまいました。

なお、梅関は、いわゆる「仙台四大画人」の1人であります。

(6)
注(1) 菊田定郷著。昭和8年発行。1万5千余名を収録し、1,500ページに近い労作。多少批判
もあるが、出所を明示して主観を入れていない点が長所で、現在郷土人名事典としては唯
一のものである。

注(2) 本願山と号し、浄土宗、寛永13年〔1636〕開山で、堂宇宏壯を極めていたというが、宝
永5年〔1708〕の火災で全焼し、その後仮堂を建立して明治維新に入ったが、隣地正雲
寺の管理に移して廃寺となった。

注(3) 画家。諱は岳、東斎後に梅関〔梅館と号した時期もある〕と号した。初名は智義、字は正
剛、通称は善輔、後岳輔と改めた。幼時から画を好み、根本常南〔周防の画人、通称匡輔、
常南また蟻斎と号した。南画山水にすぐれ、諸国を周遊して、寛政・文化の頃仙台に来て
いる。梅関が学んだのはその時である。〕に師事した。常南は梅関の画才を認めて「頭角
すでに現わる、必ず為す所あらん。」といった。やがて江戸に上り谷文晁に学んだが、程
なく京都・大阪に移って刻苦画技を磨いた。偶然長崎に住む清国人江稼圃の存在を知った

梅関は、直ちに長崎に向った。27才の時であった。稼圃は中国商人であったが、金銭に淡泊で、絵に遊ぶという文人画家の本領を身につけた人物だった。稼圃はこの未知無名の梅関の求めに快く応じ、その秘伝を伝えた。13年に及ぶ稼圃の教えは、彼の方向を決定し、その作品に大きな影響を与えたのである。梅関を理解し、敬愛する人は少なく、京都・大坂では頼山陽・篠崎小竹など一流人との深交があった。仙台に帰ってからは、東東洋・大槻平泉・釈南山・佐々木中沢等第一級の文人に接し、涌谷邑主伊達桂園の厚い庇護を受けた。その画は豪壮雄健で、最も得意とする画材は梅であった。しかし、パトロン伊達桂園の死後、経済的に追いつめられた梅関は、天保飢饉の最中、一生独身を通し、孤独に堪えつつ一筋に画に生きてきた命を、自らの手で断った。天保15年〔12月5日弘化と改元、1844〕1月19日、61才であった。「東藩史稿」巻之25（作並清亮）に『弘化元年正月十一日歿ス、年六十一。○名人忌辰録〔関根只誠編〕ニ正月十三日[×]年六十二ニ作ル仙台人物史〔今泉篁洲〕ニ正月十九日年六十一』と記してある。

注(4) 新寺小路にあり、浄土宗、弘誓山と号する。明治維新後、隣の生因寺はこの寺に吸収された。

注(5) 江戸後期の儒者。大阪の人。古賀精里に朱子学を学び、詩文・書をよくした。（1781～1851）。梅関の友人佐々木中沢の依頼によって執筆した梅関の碑文は『近世輿人以画聞於天下者以梅関山人為冠』〔近世輿人にして画を以て天下に聞ゆるもの梅関山人を以て冠と為す〕の一句で始まり、その後多くの梅関伝の根本資料となった。「名取郡誌」にも『梅関の伝は墓表に拠ったが一番にいい。梅沢和軒の日本南画史を見ても、東京経済雑誌社の大増補大日本人名辞書を見ても、この墓表が材料に使はれてゐる。墓表は梅関の友人佐々木知芳〔中沢〕が記した行実を材料として篠崎小竹（名は弼、大阪の儒者）がものしたものである。このことは墓表中にも見えてゐる。』

注(6) 明治の前期、南画の大家で控訴院判事として仙台に在住した川村雨谷が、ほぼ同時代の菅井梅関〔1784～1844〕・東東洋〔1755～1839〕・小池曲江〔1758～1849〕・菊田伊洲〔1791～1852〕の4人を顕彰して「仙台四大画人」と呼んだのに始まる。

資料 本食い蟲五拾年（常盤雄五郎）

仙台市史第7巻

菅井梅関、菅井梅関の死（「森銑三著作集」第3巻の内）